同志社大学 良心学研究センター主催 公開シンポジウム

自然科学と新島襄

新島襄が同志社大学設立に奔走していた 1880 年代後半、日本社会では自然科学を学ぶ風潮はまだ乏しかったのですが、新島は自らアメリカで学んだ自然科学の重要性を考え、第 1 回卒業生・下村孝太郎をアメリカへ留学させ、同志社に科学を持ち帰らせることを夢見ていました。J.N. ハリスの寄付を受け、下村により大学レベルの理化学校が開校しましたが、新島はその一年前（1890 年）に亡くなっていました。

新島がアメリカで学んだ自然科学とはどのようなものだったのでしょうか。自然科学と新島襄の関係を掘り下げながら、新島が考えた良心についても考えていきたいと思います。

● 日時：2016 年 6 月 21 日（火）16:40 ― 18:30

● 場所：同志社大学 京田辺キャンパス 言（ことば）館 チャペル

● 講演：

大鉢 忠（同志社大学 理工学部 名誉教授）

司会：小原 克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）

コメンテーター：

和田 元（同志社大学 理工学部 教授）

林田 明（同志社大学 理工学部 教授）

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター

CONSCIENCE

E-mail：rc-csc@mail.doshisha.ac.jp http://ryoshin.doshisha.ac.jp

良心を世界に―良心を覚醒させる知の連携と知の実践 良心学研究センターは、現代世界における「良心」を考察し、その応用可能性・実践可能性を探求することを通じて、学際的な研究領域として「良心学」を構築し、さらにその成果を国内外に発信し、新たな学術コミュニティを形成することを目的としています。

講師略歴

大鉢　忠（おおはち　ただし）

1941 年９月　満州国遼陽にて誕生。終戦後引き揚げ、京都にて育つ。
1960 年３月　京都府立鴨沂高校卒業
1960 年４月　同志社大学電気学科入学
1966 年３月　同志社大学大学院工学研究科電気工学修士課程修了
1966 年４月　同志社大学工学部助手
1975 年６月　工学博士（同志社大学）
1977 年～78 年　イギリス, バース大学で在外研究、客員研究員として約１年間滞在
1978 年～79 年　アメリカ、アーモスト大学物理学科に客員研究員として約１年間滞在
1984 年４月　同志社大学教授
2012 年３月　同志社大学退職
2012 年４月　同志社大学名誉教授、電磁エネルギー応用研究センタ嘱託研究員、界面反応成長研究所（IRE Laboratory interface reaction epitaxy laboratory)代表

良心学研究センター主催 公開シンポジウムのご案内

■ 7 月 16 日（土）13:00-15:00、今出川キャンパス 神学館３階 礼拝堂
「キリスト教主義大学における建学の精神――関西学院大学における取り組み」
【講師】神田 健次（関西学院大学 神学部教授）
【コメンテーター】横井 和彦（同志社大学 経済学部 教授、キリスト教文化センター長）
原 誠（同志社大学 神学部 教授）

※良心学研究センターが主催した過去のシンポジウムの配付資料や動画は、すべてウェブサイト（http://ryoshin.doshisha.ac.jp）や YouTube で公開されています。ぜひ、ご覧ください。

自然科学と新島襄

１．はじめに

新島襄はアメリカでの約９年間の学びを終えて、アメリカンボードの宣教師として帰国し、1875 年（33 歳）、同志社英学校を設立しましたが、アンドーヴァのフィリップス・アカデミー在学中 1976 年（25 歳）にその内心を数学の教科書の遊び紙にメモ書きし「独立一箇の教師と為り国家人民の為独一真神の子耶蘇の為に・・・」とその志を示していました。新島の留学時代のニューイングランド、アーモスト大学では地質学と宗教が一つに融合して自然神学の考え方が残っていた時代であり、自然科学系の授業が多くなされていたようです。

新島が同志社大学設立に奔走した時代は、日本の社会では自然科学を学ぶ風潮は乏しく、卒業生はキリスト教伝道に力を入れていました。新島は第１回卒業生下村孝太郎をアメリカへ留学させて同志社に科学を持ち帰らせることを夢見ていたところに、J.N.ハリス氏からの１０万ドル寄付を受ける話がまとまり、理工学部の源流となった大学レベルの理化学校が 1880 年９月に下村により設立されました。でも新島はその８ケ月前 1890 年１月（48 歳）に他界しました。その新島がアメリカで学んだ自然科学とはどのようなものであったでしょうか。光館で「新島襄と自然科学」に関した展示が行われていますが、新島襄と自然科学の研究は 1975 年の同志社百周年で 100 年史編纂の段階で、故島尾永康元工学部教授によってはじめられ、ほぼ全てを示すほどに論文にまとめられています。[島尾永康「新島襄と自然科学」『新島襄の世界–永眠百年の時点から』北垣宗治編晃洋書房(1990 年), p.141]。新島襄の自然科学ではなく、自然科学における新島襄の関わりとして考えて行きます。

２．自然科学と島尾永康

３．新島襄の学んだ自然科学

４．新島の志と大学設立運動から理工学部へ

５．おわりに　新島襄・同志社大学における良心

良心という言葉は英語では conscience（共に知る）と表記され、道徳的な行動判断基準をもち、正しく行動しようとする心の働きとして、日本国憲法第３章国民の権利及び義務第 14 条に「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。（Freedom of thought and conscience shall not be violated.）」と権利としても定められています。同志社大学が建学の精神として公表するのは「良心教育」であり，　2013 年の文系学部の今出川校地移転に際して、薩摩藩邸跡地に建てられた建物の名前を良心館とし、本公開シンポジウム開催の良心学研究センターをも立ち上げました。今出川、京田辺キャンパスの正門近くの良心碑「良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ」は、現在アメリカのフィリップス・アカデミーを含め９基があります。

行動判断基準は個々により異なりますが、いろいろあっても良いことが権利として与えられており、自治自立の人物として自己の判断力をもつためには、自然科学、人文社会科学、歴史認識など幅広い知識の獲得と、謙虚な心を養うことが、新島が考えた良心に近づけるのではないかと思っています。

「人間の偉大さはその人の学問にあるのではなく、自分自身にとらわれないことにあるのである。」［新島襄の生涯と手紙『新島襄全集 10』同朋舎（1985 年）p. 284、Life and Letters of Joseph Hardy Neesima(1980) p. 261　デジタルブック phttp://www.doshisha.ed.jp/d_book/top/book1/#page=279］